

# 明治維新时期西洋医学導入過程の再検討

尾 崎 耕 司

## 要 旨

本稿は、日本の西洋医学導入の過程について、特に明治維新の開始から明治三年に政府がドイツ人医師招聘に踏み切るまでの過程を再検討しようとするものである。西洋医学採用の過程については、従来から分厚い研究蓄積がある。しかし、従来の研究はやや安易に聞き取り史料に頼る傾向があり、実証の面で不十分さが否めなかった。本稿も、史料の乏しさからこれをすべて覆せるものではないが、新たに発見された史料を用いて、少しでも事実関係を明らかにしていこうとするものである。具体的には、『松岡時敏関係文書』や東京大学医学部図書館所蔵文書、関寛斎の『家日記抄』などを手がかりに、日本の西洋医学導入が、まずドイツ人医師招聘ありきではなかったこと。そうではなく、当初学校権判事の松岡時敏や、医学校取調御用掛及権判事の岩佐純、相良知安らが模索したのは、医学校兼病院でのイギリス人医師とオランダ人医師との併用であったこと。この併用計画をイギリス側が拒んだ明治2年5月頃からむしろ相良らによるそれへの排斥が起り、ドイツ人医師招聘への転換が図られたこと、等があきらかになる。

キーワード：明治維新、西洋医学、大学、19世紀、イギリス、オランダ

## 1 はじめに

明治維新以来、日本は西洋医学の導入を推進する。その中で、ドイツの医学が採用されたことは周知の事実である。しかし、なぜドイツの医学が採択されたのか、それは未だ不明な点が多い。本稿は、維新の開始以後明治3年の初頭に政府がドイツ人医師招聘に踏み切るまでの過程について再考を試みようとするものである。

当該期の西洋医学採用の過程については、明治以来非常に分厚い研究蓄積がある。その研究史の整理と本稿が解明すべき具体的な問題点の抽出は、改めて次章でおこなう

と思うが、しかし如何せん史料の乏しさから、従来の研究はいきおい聞き取り史料などをもとにおこなわれる場合が多かった。本稿ももちろん関係者の聞き取りを用いずに議論を打ち立てることは不可能である。ただし、従来の研究は確実な文献史料との照合なしに、聞き取り史料が一人歩きして論が立てられてきた観がある。たとえば、ドイツ医学に先行するイギリス医学導入の可否をめぐる山場となる、明治2年6月に山内豊信（学校知事）と相良知安（<sup>ともやす</sup>医学学校取調御用掛及権判事。佐賀藩出身）との論争について、鍵山栄の『相良知安』などは、豊信に対して相良が「更に論鋒を転ぜんと」したところ、「大喝 一声」「知安下レッ」と主家鍋島直正からの声があり相良が平服したとしている。<sup>2)</sup>しかし、このような話し言葉の一言一句がどこまで本当に発せられたのであろうか。鍵山は、田中潮洲が大正期に著した文章を引用しているのだが、その田中自身が、「我輩は是迄故老に聞きもし、亦自から会つて見て直接聞いた事共」ではあるけれども、「素より索ぬべき材料も少なければ、精確を期し得ざるべく」<sup>3)</sup>と断りを入れている文章が、そのまま事実として取り上げられてしまっている。これでは、史実とフィクションがない交ぜになってしまう。

繰り返しになるが、当該期の西洋医学導入に関する文献史料は極めて少ない。したがって、本稿も決して通説をすべて覆すまでには至らない。ただ、数は少ないが新たに発見された史料を用いて、わずかずつでも事実関係を明らかにしていく作業の繰り返しが重要と思われる。本稿が、その一助となれば幸いである。

## 2 研究史の整理

冒頭に述べたとおり、ここでは研究史の整理をおこない、本稿が検討すべき具体的な問題点を抽出したい。

明治維新期の西洋医学導入については、富士川游の『日本医学史』（1904年）が、今日に至る通説的理解の骨格を作ったといつてよい。<sup>4)</sup>富士川によれば、維新開始当初、戊辰戦争で戦傷病兵の治療をおこなったイギリス江戸・神奈川副領事で医師のウイリアム・ウイリスと、<sup>5)</sup>旧幕時代から長崎精得館で教鞭を執り、明治新政府発足後旧幕府との約束である病院建設および医学教育の履行を迫るアントニウス・ボードインと、イギリス、オランダ両国の医師の動きが現れる。これに対して、長崎でボードインに師事した経験を持つ越前藩医岩佐純および佐賀藩医相良知安が新政府の「医道改正御用掛」（正確には、<sup>6)</sup>医学学校取調御用掛及権判事）に任命され、「ボードインノ事ヲ処理」し、大学南校に招聘されていたフルベッキの言質などをも取り付け、「学則ノ範ヲ独逸ニ採ル事ニ決シ、教師ヲ独逸国ニ聘スルノ議」が整っていく。最終的に明治4年（1871）にドイツからミュルレル、ホフマンの両名が大学東校に着任すると、ここにドイツ医学の導入が定まった

というのである。

かかる骨子で西洋医学の導入を描く論じ方は、大正期の『医制五拾年史』<sup>8)</sup>や、戦後の『東京大学医学部百年史』<sup>9)</sup>、さらには『医制百年史』<sup>10)</sup>にも踏襲されており、その影響のほどがうかがえる。

しかし、富士川の『日本医学史』には問題点がある。富士川の叙述は、自身1890年代におこなった石黒忠恵に対する聞き取りを基礎にしている。たとえば戊辰戦争時のウイリスの活躍について、石黒の回顧が、「越後高田より会津に至るまでに上下肢を切断すること十六回、我邦にて過酸化満俺水を創処に用ひ鉄のスプリントを骨傷に用ふる等は此時を以て最初とす」とあるのに対して、富士川も「越後、高田ヨリ会津、白河ニ至ルマデ数ヶ処ノ戦争ニ参シ、上下肢ヲ切断スルコト十六回ノ多キニ及ビ、此時過酸化満俺水ヲ創傷ニ用ヒ、鉄ノ「スプリント」ヲ骨傷ニ用フル等、大ニ外科術ノ新面目ヲ開キタリ」と似た記述になっていることから、それはよく分かる。ところがこのことは、石黒が直接には見分しなかったであろう事柄までも採り入れてしまう結果につながっていく。たとえば石黒の回顧談には、「越前候松平春嶽の臣岩佐玄圭、肥前候鍋島閑叟の臣相良弘庵は共に長崎に在りてボードインに学びしものなるが故に、岩佐玄圭 純、相良弘庵 知安、の兩人を徴してボードインの事を処理せしめ」<sup>12)</sup>との記述がある。富士川もこれに倣い、「政府ハ岩佐玄圭（純）相良弘庵（知安）ガ、嘗テボードインニ学ビシコトアルヲ以テ、兩人ヲ徴シテボードインノ事ヲ処理セシメ、次デ兩人ヲ大学権判事ニ任シ医道<sup>改カ</sup>政正御用掛トナシタリ」と記している。しかし、岩佐、相良の両名が医学校取調御用掛に任命される明治2年正月22日の時点では、石黒は故郷越後への疎開を続けているのであって、自ら問近にいて見分したわけではないはずである。なかでも、「ボードインの事を処理せしめ」とあるけれども、ボードインの何をどう処理したのかが不明のままなので、オランダ、ドイツ、イギリスの各医学なり医師の動向や関わりを理解する上で混乱を生じる要因となってしまう。

戦後になると、当事者に関わる史料の公開が進んだので研究が深められていった。鍵山栄による相良知安の伝記的研究や、ボードインの来日から帰国に至るまでの動向を明らかにした森川潤の研究<sup>16)</sup>、また、萩原延寿の尽力によるウイリスの関係文書の収集と公開（その邦語訳が『幕末維新を駆け抜けた英国人医師—甦るウィリアム・ウィリス文書—』（大山瑞代訳）として公刊され、利用者に便宜を与えている<sup>17)</sup>）、およびこの文書を活用したヒュー・コータッツィの研究などはそれを代表するものといえよう<sup>18)</sup>。

なかでも、ウイリスの文書は、明治2年10月28日に、彼が政府を辞し鹿児島医学校へ転出する意志を固めたことを示す薩摩藩との契約書が残されているなど<sup>19)</sup>、東京の医学校兼病院における主導権争いからウイリスがいつ離脱するかを知る上で貴重な情報を与えてくれている。ただ惜しむらくは、このウイリスの文書自体、彼が医学校兼病院に勤務

して以降、特に明治2年3月11日(1869年4月22日)の書簡から同10月28日に薩摩藩との契約書が交わされる間のものが少なく、その間に起こるドイツ医学導入の決定過程については情報の少なさが否めない。<sup>20)</sup>

現在発表されている研究の中で、その詳細さや利用している史料の多様さにおいて群を抜いているのは、『東京大学百年史』<sup>21)</sup> といつて差し支えあるまい。同書はその性質上、医学校兼病院のみに止まらず、昌平学校や開成学校を含め大学校の設置全体を見据えた記述がなされており、また、東京大学医学部図書館所蔵の『諸規則 明治三年』等、史料の所在も伝えてくれていて非常に有益である。<sup>22)</sup>

『東京大学百年史』におけるドイツ医学導入の記述は、ウイリスやこれを支持する山内豊信らのイギリス医学推進派と、岩佐(およびその主家としての松平慶永)、相良、ボードインらがドイツ医学を推進するものとして、明治2年の早い時期から対立すると描かれる点に特徴がある。しかし、筆者はこの描き方には賛成しない。

『東京大学百年史』は、明治2年正月22日に医学校取調御用掛に任命された岩佐、相良とボードインとの大阪での面会をもって、また、「一 教師は独逸国より壮年盛学之医、英学ニ達候者を御雇相成度候事」と記された相良の建議案を明治2年4月のものと推定して、これらから明治2年の前半にドイツ医学への一本化が岩佐、相良の間で固まったかの如く描く。<sup>23)</sup> しかし、これは正しくない。たとえば相良の建議案を見てみよう。これは三か条からなる文書で、その第三条にドイツ医学の採用が述べられている。ところが、その前の第二条を見ると、「一 学校兼病院は必高燥広境之地ニ於て当春取調候通一切日新之規範ニ従ひ御築営相成度候事」と記されている。<sup>24)</sup> 他方、国立公文書館所蔵の『公文録』の中に、「礫川元水戸邸へ大学校建設三学合併ノ儀伺」との件名で、明治2年10月、当時の大学別当松平慶永から、派閥争いを続ける皇、漢、洋三学の融和を図るべく昌平学校、開成学校、医学校の三校を旧水戸藩邸に移転統合する旨が記された伺いが残されている。その文面には、「昌平校ハ今病院土地下湿瘴気多ク療養ノ為メニ不宜故、高燥ノ地ニ相移シ度旨申聞候間」と記されている。<sup>25)</sup> 文脈からしてここにある「昌平校」は医学校の誤りであろうが、そうすると、相良の建議が「学校兼病院は必高燥広境之地ニ於て当春取調候通一切日新之規範ニ従ひ御築営相成度候事」とあるのに対して、この伺いでは「高燥ノ地ニ相移シ度旨申聞候間」とあり、ちょうど符合する形になっている。松平慶永が大学別当となるのは同年の8月24日であるけれども、おそらくは相良の建議はこの頃、すなわち明治2年の8-10月頃になされたものとみるのが妥当ではあるまいか。少なくとも、4月に書かれたものとは考えにくいのである。また、『東京大学百年史』は、明治2年3月に当時大阪仮病院にいたボードインが提出した「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」という、ボードインに対する処理の内容を示してくれるであろう好材料を取り上げているにもかかわらず、そこでは史料の文言を具に検討する作業がおこなわれてい

ない。<sup>26)</sup>かかる史料との照合なしに、岩佐の後年の講演にある、「ボードインと深く熟議し、欧州中医学の卓越した国としてドイツに秀でるものはなく、ドイツに範を採ることを決定し、政府に建言した」との文言のみから、岩佐、相良、そしてボードインが明治2年の早い時期にドイツ医学採用に傾斜したと強調してしまうので、<sup>27)</sup>その結果、明治2年前半の実相を対立一色に塗り込めてしまっているのである。

以上のように、これまでの研究では、まず富士川の『日本医学史』以来、石黒が越後に疎開をしていた間に起こった、岩佐純、相良知安兩名のボードインへの対応が不明であり、各国の医学や医師、そしてその推進派が維新当初の段階でどのような関係になっていたのがよく分からないこと、富士川の時代に比べて多くの史料が利用できるようになった『東京大学百年史』でも、イギリス医学推進派とドイツ医学のそれとの対抗を強調するあまり、同じ問題点が克服されずにいることを明らかにしてきた。<sup>28)</sup>

そこで次節では、限られた史料からではあるが、可能な限り維新当初の各医学を推進する動きを整理し再構成してみよう。

### 3 医学校兼病院設立と岩佐純、相良知安

#### (1) ウイリス雇用に至る経緯

本節では、戊辰戦争のはじまりから明治2年2月に下谷和泉橋通の旧藤堂和泉守邸に医学校兼病院が設置される頃までの過程を整理してみようと思う。

戊辰戦争は、日本の医学にも大きな影響を与えたことが知られている。日本にも旧幕時代よりオランダを経由して西洋医学の輸入がなされてきたが、しかし一方では依然東洋医学の影響も大きく、就中、朝廷では孝明天皇の西洋の文物に対する忌避も手伝って西洋医学の正式採用はなされてこなかった。ところが、戊辰戦争がはじまると、戦闘が生み出す多数の戦傷病者の治療、特に外科的治療が必要となったことから西洋医学への関心が急速に高まることになった。<sup>29)</sup>

この中で、いち早く西洋医学、とりわけイギリスのそれをまだ京都にあった新政府部内に持ち込もうとしたのが薩摩藩であった。慶応4年正月24日、藩主島津忠義は伺いを提出し、イギリス人医師ウイリスの入京と、鳥羽伏見の戦い以降の戦傷病者の治療を願ひ出る。<sup>30)</sup>これをもって2月18日ウイリスは入京を果たし、以後10日ほど治療を実施、また3月の二度目の入京の際には、「土佐と呼ばれる大名が肝臓の炎症を起こしていたのを治療しました。この大名は二〇オンスもの出血をしており、二二〇匹の蛭があてがわれていたそうです」と、土佐の山内豊信の病氣治療をおこなっている。<sup>31)</sup>ここからウイリスと山内豊信との交友が始まる。以後、ウイリスが横浜軍陣病院や、さらに越後高田、柏崎、新潟、会津の各地に自ら出向いて治療をおこなったことは周知の通りである。

さて、それではウイリスは、新政府の医学校および病院の整備にいかにして参入していったのだろうか。

新政府は、旧幕府の西洋医学伝習施設であった医学所（下谷御徒町1丁目）を接収する<sup>32)</sup>、明治元年6月26日にはこれを新政府の医学所と改め、薩摩藩医で、長崎でモーニツケに牛痘法を学んだことで知られる前田杏斎（信輔）を事務統括に据え開所する<sup>33)</sup>。また、7月20日には医学所からさほど遠くない下谷和泉橋通の藤堂和泉守邸を収用し病院も設置される（当初「仮病院」、8月からは「大病院」と称す。以下、大病院と記す<sup>34)</sup>）。

ここに同じく7月20日、横浜軍陣病院の移転方針が打ち出され、ウイリスも大病院への参入の足がかりを得ることになるのだが、ただし、ウイリスが大病院に迎えらるまでのプロセスは込み入っており、その中にいくつか問題が潜んでいて注意が必要である。

まず、ウイリスは前田杏斎のもとで大病院医師に就任したわけではない。詳細は次節に譲るが、明治元年10月以降前田が失脚をし、その後明治2年正月17日に、医学所、病院等五局の取締に就任した同じ薩摩藩医の石神良策のもとで、ウイリスは勤務を開始するのである<sup>37)</sup>。

石神は、7月12日から横浜軍陣病院の頭取を勤めていた人物で、ウイリスと関わりが深く、ウイリスの盟友アーネスト・サトウによれば、サトウらがウイリスを総合病院の設立に参画させるべく日本政府に雇用させようと目論んでいた時、石神はウイリス側から日本政府への交渉の窓口となっていた。また、やはりサトウによると、「私は五日（元年10月22日一注、尾崎）にまた病院へ行って、石神や山下と一緒に泊まった。彼らは、病院長に任命されていた前田杏斎という男のことで、大いに不平を訴えた<sup>40)</sup>」と、石神は同じ薩摩藩医でも前田杏斎とは不仲であったという。我々は、同じくウイリスを推す薩摩藩医でも、そのスタンスには違いがあることを念頭に置いておくべきである。

次に、ウイリスの雇用は、議定山内豊信が学校取調兼勤（明治元年11月2日。同12月13日からは知学事）となり、学校に関する責任者の立場に就いた時におこなわれたのだが<sup>41)</sup>、これも少し具にその動向を見ておく必要がある。

山内豊信がウイリスと親しく、その雇用を推し進めたことは間違いない。しかし、それはひとつの決まった方針で進められたわけではなかった。豊信が知学事となって以降、明治元年12月25日に医学所は東京府から学校（昌平学校）へと移管される。この当時昌平学校と開成学校を含めた大学校の設立が本格化していたことは周知の事実だが、豊信のもとで、医学校も一度は大学校の一局に組み入れられる動きがあったのであり、病院を管理する軍務官の副知事大村益次郎からウイリスに、「今般病院相設候ニ付、一ヶ年ノ間貴下相雇申候ニ付テハ、月俸墨西哥ドル八百枚ツゝ差出可申候也」との申出がなされ、ウイリスの雇用に向けての話が進められたのは、ちょうどこの12月25日のことであつた<sup>44)</sup>。



ところが、年が明けて石神が医学所、病院等五局の取締に就任すると、それと同じ正月17日には、医学所の管轄は、再び学校から東京府に<sup>45)</sup>戻される。その上で2月には、「医学所ヲ旧津藩邸（旧藤堂和泉守邸一注、尾崎）ニ移シ病院ト合併」と、これまで近接はするが別の場所にあった両施設を、医学所を病院の側に移す形で合併がおこなわれた。この時、医学所は医学校と改められ、病院と併せて「医学校兼病院」と呼ばれるようになる。<sup>47)</sup>ウイリスの実際の勤務が始まるのはこの時である。

このように、同じ知学事山内豊信のもとでおこなわれたウイリスの雇用に関する動きでも、大学校の一局としての医学校を中心とする施設に雇用するのか、大学校からは切り離されるのか、そこには一定の揺れが見て取れるのである。

## (2) 岩佐純と相良知安

岩佐純と相良知安の二人が医学校取調御用掛に就任するのは、石神が医学所、病院等五局の取締に就任した5日後の明治2年正月22日のことであり、しかし東京から離れた京都においてであった。<sup>48)</sup>それでは、この二人は、以上見てきた明治2年2月の医学校兼病院設立までの過程とどのようにかかわるのであろうか。ここでは、これを二つの側面から見ておこうと思う。

まず第一の側面は、「医学校取調御用掛」という官職名が表しているように、彼らは医学校の整備充実のためにその任に就いたということである。岩佐は、後年（1910年）東京医学校設立の経緯を回顧した談話の中で、「明治元年の冬」に土佐の後藤象二郎（新政府参与）から侍医となるよう勧められたがこれを辞退し、「大に学校、病院を創設し、西洋教師を聘し、各科専門の教授を設け、大に医師を教育して、完全なる医師を養成すること今日の急務なれば、願くば医学校創立の任を命ぜられたきことを陳述し」、「医学校創立御用掛を仰付られ」たと述べている。<sup>49)</sup>医学校の整備を望んで政府入りしたのである。

相良知安はこの岩佐が推薦したのだというが、<sup>50)</sup>相良の場合も政府入りの経緯を、「老公（鍋島直正一注、尾崎）ニ供奉シテ上京ス、三十四歳徴士トナリ医学校ヲ専任ス、時ニ自考ルニ、医ハ純文ニシテ和戦ノ大義ニ与カラズ、七百年来武士権ヲ執テ医ヲ賤ンシ、医モ亦タ自ラ賤ンシテ至ラザル処ナシ」、「而シテ医学ハ大学ノ外ニ在テ未タ本位ナシ」と回顧しており、そこには医が士族から蔑まれ大学校から退けられそうになることへの危機感が表されていた。<sup>51)</sup>

ボードインは、岩佐、相良の両名に医学校整備の知識を提供することによって支援した。富士川游の研究以来、「兩人ヲ徴シテボードインノ事ヲ処理セシメ」<sup>52)</sup>と記されてきた、岩佐、相良の両名とボードインとの会合は、この医学校の問題についてであった。

明治2年3月にボードインの名で提出された「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」は、日本

語で記されたその筆跡が相良知安のものに酷似しており、ボードインがオランダ語で記したものか口述したものを相良が筆記したのではないかと推察されるが、この頃のボードインの医学校兼病院についての考え方を示してくれる。そこでは、医学校兼病院の構造について、「此造営ノ内ニ三大厦アリ、一ハ病院及ヒ附属ノ副舎、二ハ医学校、三ハ書生寮或ハ医師ノ居宅ナリ」と「三大厦」からなるものとし、「医学校ヲ別テ二局ト為ス、一ハ究理学舎密学ヲ教ルノ処ト為ス、一ハ医学ヲ講習スルノ処ト為ス」との医学校の教育内容や、病院の構造等、それぞれ注意すべき項目が述べられている。<sup>53)</sup>このボードインの意見の中で注目したいのは、まず、医学校と病院との関係について、「病院ハ殊ニ内科及ヒ外科ヲ研窮スル生徒ノ実験校トナスヘシ」と、病院はあくまで臨床を学ぶ「実験校」とされていることである。<sup>54)</sup>医学校兼病院の中心は医学校にあるべきであることを示していたのである。また、「病院ノ職員ハ欧羅巴教師三人、藥局師一人ヨリ成ル」とする一方で、「其他日本ノ職員ハ総官（ホーフトドクトル）二人ヨリ成ル、一人ハ医学校ヲ管シ生徒ヲ指揮シ其行狀ト学業ノ勤情ヲ検査ス、一人ハ病院ヲ管シ其事務ヲ主宰シ患者ノ調護食養ニ注意シ当直ノ諸務ヲ検ス、日本医士十人ハ総官ノ指揮ヲ受テ病院ノ当直或ハ藥局司トナル」と、西洋人の医師を雇用しつつもこれはあくまで病院勤務とし、それとは別に二人の「総官」には日本人が就任するものとして、日本人が全体の指揮を執ることが示されていた。<sup>55)</sup>

相良知安の文書の中に、医学校の構造などについて、このボードインの意見書のすぐ後に書かれたとみられるメモ書きが残されているが、そこでは、「学校三箇ノ大厦ヲ合セテ成ル、一ヲ学校トシ、二ヲ病院トシ、三ヲ書生及ヒ教職ノ寄宿トス」と、学校を三つの「大厦」とし、「学校分ツテ二トス、一ハ究理分離ノ学校トシ、二ヲ本来ノ医学校トス」ることなど、ボードインの意見書を継承する形になっていた。<sup>56)</sup>ボードインが、相良の以後の医学校整備方針にいかにか影響を与えたかがうかがえよう。

ところで、以上のように医学校整備に向けての岩佐、相良とボードインとの緊密なつながりをみながらといて、ここから直ちに、他方ウイリスらとの対立を導き出すのは早計である。次に第二の側面として、明治維新開始から岩佐、相良両名とウイリス（イギリス医学）および彼を推す人たちとの間になにか接点はなかったか見てみよう。

まずは、岩佐純について。

（慶応4年2月一注、尾崎）二十九日（中略）

英医ウリヤムス（ウイリス一注、尾崎）、津輕某ノ左腹ノ頑瘤ヲ切斷スル由、新宮ヨリ申来リ、新宮氏迄罷出候処、加藩黒川良庵、同伍堂、越藩岩佐玄珪、田代萬隆、馬島某、宇和島布天民、新宮涼角（涼閣一注、尾崎）、同拙藏等来会、英医不參。（傍点一尾崎）<sup>57)</sup>

右は、慶応4年2月29日、当時徳島藩医として入京していた関寛斎の日記である。ここ



では、関が「新宮」（新宮涼閣、新宮拙蔵のどちらかは不明）より誘われ医師の会合に出席したところ、それはウイリスが外科手術の腕前を披瀝しようとするものであったというのであり、その場には、各藩の西洋医に混じって「越藩岩佐玄珪」すなわち岩佐純が来会していたというのである。

岩佐は、主家松平慶永に随行してすでに王政復古以前の慶応3年11月には京都に上っている。相良の場合は、鍋島直正が翌4年2月29日に京都に到着し翌日議定職に就任するから、これに随行して京都に上ったものとみられ、そのせいもあってかこの関の日記には登場しない。ともかく、日記に記された医師の内、新宮拙蔵がウイリスを入京させた薩摩藩の藩医であり、ウイリスと日本人医師との引き合わせに一役買ったものと思われるが、他は京都の西洋医を代表するひとり新宮涼閣や、佐久間象山が師事したことで知られる加賀藩の黒川良庵、中風治療に電気式治療を採り入れた宇和島藩の布天民（志賀天民）、この後奥羽出張病院で戦傷病者の治療に活躍する徳島藩の関寛斎等々、この時代を代表する西洋医が名を連ねている。結果的にはウイリスは不参加となるのだが、2月18日に初めて入京を果たしたウイリスに、当時日本を代表する西洋医が紹介を受けようとした際、そのメンバーのひとりに加わっていたのが岩佐純であった。関の日記の3月19日の条には、「津軽藩士木村氏ノ瘤ヲ切断ス、執刀岩佐、助刀自<sup>分</sup>□<sup>カ</sup>」とあり、岩佐は関寛斎を「助刀」に執刀医として手術がおこなえるほどの腕前を持っていたことをうかがわせるが、ともかく彼は明治維新の当初からウイリスを推す人たちをも含めて注目されていたのである。

次に、相良知安について。明治初年の相良の動向を知る術はほとんどない。ただし、佐賀藩の動向へと話を広げて見る時、次の史料は注目される。

すなわち、いま東京大学医学部図書館に、『明治元年六月ヨリ 日誌』と題された帳面が残されている（以下、『日誌』と略記す）。ここには、明治元年6月26日から10月3日にかけて医学所の事務統括を命じられた薩摩藩医前田杏齋（6月29日からは医学所頭取<sup>61)</sup>）や「医学所附属」として前田の下僚となった月岡勝次郎や小林松之助らの動向が記録されていて興味深い。「対州上屋敷仮病院之儀」と当初は宗対馬守邸に置かれていた仮病院を、「藤堂和泉守上屋敷頭取見分之上」と藤堂和泉守上屋敷を実地に見分し、藤堂藩留守居役に「仮病院ニ相成候而も差支無之哉」を尋ね、「聊差支無之奉畏候」と回答を引き出すなど、大病院設置の実務を担ったのも前田杏齋らであったのである<sup>63)</sup>。

さて、前田や下僚である月岡らはその事務遂行にあたっては市政裁判所（のち民政局）の指示に従っていた。そして、その市政裁判所は、「鍋島邸市政裁判所」と記されていたとおり明治元年7月時点では佐賀藩邸に置かれており、<sup>64)</sup>「小林松之助会計局江罷出候処、退出後ニ付、鍋島邸へ罷越、江藤新平<sup>65)</sup>頭取よりの書翰相渡候事」や、「江藤新平、島田右衛門へ金子受取手形入頭取文通添持参致し、返翰受取帰院之上、頭取役宅ニ相届

候事<sup>66)</sup>」とあるように、前田らは、江戸鎮台府判事となって市政に当たっていた江藤新平や島田右衛門<sup>よしたけ</sup>（義勇）ら佐賀藩士と連絡を取りながら事務を執り行っていた<sup>67)</sup>。星原大輔の研究は、江藤新平や島田右衛門らが、鳥羽伏見の戦いの後、他藩の藩士と会合を重ね注目を受けるようになったとし、その中で彼らが面会していた中に薩摩の前田杏齋<sup>68)</sup>がいたことを示しているが、江藤や島と前田杏齋とは、維新開始直後からの知己であったのである。

この市政裁判所（民政局）の江藤、島と医学所頭取の前田（9月4日からは「病院知事」<sup>69)</sup>も兼任）のホットラインは、少なくともこの『日誌』に記録されている10月初頭の段階までは、医学所が鎮台府（6月）→東京府（8月）→鎮将府（9月）と移管されても変わらずに維持されている。その間彼らは、医学所、病院にとどまらず、梅毒院の設置<sup>70)</sup>や、養生所での極貧病者の治療、種痘館<sup>71)</sup>の設置等々、江戸（東京）の包括的な医療制度改革を推し進めている。

相良知安は江藤と同じ佐賀城下八戸村の生まれ（江藤が二歳年長）で、明治3年に相良が「医師」の名称を廃し「護健使（くすし）」の称を用いることを提唱した意見書をまず江藤のもとに提出したように<sup>73)</sup>、両者は近い関係にあったことは間違いない。ただし、明治元年時点での両者の接触を示す史料は見つからないので、ここで相良がどのように関わったのかについての言及は差し控えざるを得ない。ただ少なくとも、薩摩藩の藩医前田杏齋と江藤や島ら佐賀藩士とが、この時点では決して対立はしておらず、それどころか両者は江戸（東京）の医療改革に関して協力関係にあったことは注目しておいてよい。ウイリスらの属する横浜軍陣病院の大病院への統合も、この両者の協力関係の下で進められたのである。

イギリス医学を推進する中で、土佐藩についても同様に個人間のつながりを具に見ていくと、岩佐や相良との間に一種の協力関係が見い出せる。ここでは、松岡時敏（七助、号は穀軒。1814-1877年）<sup>つよさ</sup>の存在を取り上げておきたい。

松岡は、儒者出身で山内豊信の侍読となり、そのブレンとして活躍した人物であるが、この松岡が、明治元年11月2日、山内豊信が議定と学校取調の兼勤となると、同日学校取調御用掛に任命され、さらに12月12日に学校頭取、23日には学校権判事に就任し、<sup>74)</sup>大学校の設立に着手する。すでに大久保利謙が明らかにしているように、明治2年6月15日の大学校規則の起草は松岡の手によるのであり<sup>75)</sup>、彼は大学校設立のキーパーソンとして位置していたのである。

医学校および病院がいったん学校（昌平学校）の所管に移されるのは、この松岡が学校権判事に就任した直後（12月25日）のことであつた<sup>76)</sup>。松岡は、医学校を開成学校などとともに創設される大学校の分局とすることを構想していた。松岡は、大学校を単に教育の場とするにとどまらず、政治を議する公議人養成の場と位置づけようとしていた。

そして、医学校も昌平学校や開成学校と対等に公議人養成の場たらしめんことを模索していたのである。<sup>77)</sup>「七百年來武士權ヲ執テ医ヲ賤シ」、「而シテ医学ハ大学ノ外ニ在テ未タ本位ナシ」と嘆く相良らにとって、この松岡の存在は重要であった。以後、松岡は岩佐、相良の二人にとって政府部内における医学校の大学校編入の支援者となったようで、後述する西洋医学の導入をめぐる岩佐、相良と主家山内豊信との対立が決定的となる明治2年7月以降も、松岡は岩佐、相良と行動を共にしている。松岡が、豊信が学校取調兼勤を退いた後に、岩佐、相良の両名を大学少丞から大学大丞に昇進させるよう進言していることなどは、彼らの結びつきの強さを象徴しているといえよう。<sup>79)</sup>

岩佐が回顧談で「明治元年の冬」に医学校の創立を訴え医学校取調御用掛に任命されることを志願した時、それが土佐の後藤象二郎の推挙で実現したと述べられていた。岩佐、相良をドイツ医学、山内豊信ら土佐藩をイギリス医学と、対立まずありきで捉えると、この点はうまく説明がつかない。しかし、豊信のブレーンたる松岡時敏の存在を念頭に置けば、これが理解できるようになる。岩佐の訴えに対して、松岡にも来るべき大学校設立に向けて医学校もそこに編入する構想があり、事実、山内豊信知学事、松岡時敏学校権判事のもとで、12月25日、いったんは医学所の学校（昌平学校）への移管がおこなわれたのである。この時点では、松岡を仲介として必ずしも豊信と岩佐らとの間に明確な対立はなかったのではないかと考えるのが妥当ではあるまいか。

以上のように、岩佐、相良の二人は、一方ではオランダ人医師ボードインの影響を受けて医学校兼病院を医学校を中心とする組織として構成し、さらにはこれを大学校の一局とする構想を持っていた。しかし他方で、それだからといって直ちにイギリス医学およびそれを推す人々と対立が生じたのではなく、岩佐、相良の二人は松岡時敏を通じて土佐藩と、また相良をとりまく佐賀藩は江藤や島が薩摩藩の前田杏斎とむしろ協力関係を築いていた。それでは、このことは実際に新政府の西洋医学採用の過程においてどのような関わりをもつことになったのであろうか。また、この中でドイツ医学の採用とはいかなる事情から出来た<sup>しめたい</sup>のであろうか。

#### 4 イギリス・オランダ両国医師の併用計画からドイツ人医師招聘への転換

新政府がどの国の医学もしくは医師を採用しようとしていたかを検討するとき、それに先だって次の二つの点は念頭に置いておきたい。

まず第一は、既出ボードインの明治2年3月の意見書「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」で、そこには西洋医学について準拠する国についての既述はほとんどなく、ただ、「病院ノ職員ハ欧羅巴教師三人」とのみ記されていたことである。<sup>80)</sup>もちろんそこには様々な含みはあったのであろうが、少なくとも提出された意見書にはドイツを採用すべきといった

具体的なプランが示されていたわけではなく、イギリス、オランダ、ドイツなどの国の医学を当てはめても解釈ができる記述となっていたのである。

第二に、他方で大病院（明治2年2月から医学校兼病院に改称）をみると、そこには石神良策ら横浜軍陣病院関係者の合流を契機として状況の変化が現れていた。横浜軍陣病院の大病院への統合は、その方針は明治元年7月20日に打ち出されたが、その実施は遅れ10月にずれ込んでいる。『日誌』に記録が残る最後の10月3日でも、大病院側が「昨日横浜表より諸藩病人入院ニ付」出迎えたが、石神ら横浜軍陣病院側は「薄暮ニ至り病者着船無之」<sup>81)</sup>となっていた。これがアーネスト・サトウの日記に、「下谷地区の藤堂屋敷に設けられていた陸軍病院」<sup>82)</sup>との記事が出てくるのが10月6日（1868年11月19日）のことであるから、10月3日から6日までの間に合流したのであろう。

そうすると、アーネスト・サトウが、同じ薩摩藩医同士の石神と前田との不仲と、「前田が自分の職務をうっちゃって、二頭立ての馬車で市中を乗りまわして遊んでいるので、患者たちがこの男の首をたたき切ると言って、おどしたことがあるという」と記したのは（10月22日）<sup>83)</sup>、この合流からさして間を置かずのことであることが分かる。以後24日には、「病院ノ儀ハ医者看病方兎角不行届ノ趣相聞候」と政府が東京府に達し、緒方惟準らによる病院の査察が命じられる。そして、25日に急遽医学所、病院の軍務官への移管、11月2日には緒方らの病院取締就任がなされ、<sup>84)</sup>これをもって前田が失脚する。いずれも横浜軍陣病院の合流から1月ほどの間に起こった急激な変化である。結局、その緒方も明治2年に大阪に去り、明治2年正月17日、石神が医学所、病院、種痘館、黻院、薬園の五局全てを併せた取締に就任して全権を握ったのである。<sup>85)</sup>また江藤新平も明治2年3月までには佐賀に帰郷するから、このようにして医学所、大病院を通しての佐賀藩の江藤らと薩摩藩の前田を介したホットラインは崩壊することになった。

前田が失脚し石神が台頭する過程と表裏して、明治元年12月28日（1869年2月9日）には、ウイリスがその書簡で、「本日ある大名と食事をしました。私は職務上公式に彼の妻妾や家来たちに会いました」と書き送っている。<sup>87)</sup>同じ書簡の中でウイリスは、この「大名」は、その家来が堺港事件を起こしたことや、またウイリスが彼を京都で治療した経験があることを仄めかしているから、明治元年3月の入京の際に治療した山内豊信を指すことは間違いない。ウイリスは、知学事となった豊信への接近を強めているのである。また石神も、その詳細はよく分からないが正親町三条実愛の日記の明治2年3月10日の条に、「今朝石神良策来面談病院医師之事」と記されているように、議定であった正親町三条実愛に病院医師の件で面会を求めるなど、<sup>88)</sup>自らが取締を勤める病院について、中央政界のメンバーに活発に働きかけをおこなうようになっていた。

新政府の西洋医学採用の協議は、以上の、一方ではボードインとの交渉と、他方では医学校兼病院における状況の変化という、並行して進むふたつの異なる動きを背景におこ

なわれたのである。それでは、ここにいかなる事態がおこるのであろうか。

今朝岩佐玄珪より副知学事へ申出候儀有之、右之訳ハ医学所にをいてウリス<sup>マ</sup>ヘ蘭医雇入の致證合候処、同人儀大に致立腹申出候ハ、兼てより英の医法のみ御用に相成候御条約に御座候処、蘭医を合て御用ヒ有之候てハ条約と致相逸候、有胎時に相替てハ日本政府の信義無之、以の外の次第に候と申事に御座候由玄珪申出候、然に右蘭医御用之儀ハ篤と御局へ御熟談之上最初よりの順序承り然後徐に相謀可申筈に御座候、率爾覆意より如此次第に立至候、今日ハ尊君此事件に付ウリスヘ御談し被下候ため御立越被下候趣、可相成ハ小子も陪従仕申度ニ付御都合如何に御座候哉、御報被下候様仕度奉存候 以上

松岡七助

五月十日

大村益次郎様 閣下<sup>90)</sup>

右に掲げるのは、『松岡時敏関係文書』に残された明治2年5月10日、ウイリス採用の交渉をおこなった軍務官副知事大村益次郎に宛てて松岡時敏が差し出した書簡である。史料が少ない中でこの書簡はいくつかの情報を与えてくれる。まず第一に、「岩佐玄珪」すなわち岩佐純がウイリスとの交渉の役を務めていることである。この時点まで岩佐は、決してウイリスらと対立して没交渉というわけではなく、その逆で交渉の窓口となっていたのである。第二に、その岩佐が当初はウイリスと相談をした上で、「蘭医」を「医学所」すなわち医学校に採用しようとしていたことである。これは、「然に右蘭医御用之儀ハ篤と御局へ御熟談之上最初よりの順序承り然後徐に相謀可申筈に御座候」と松岡が述べている如く、松岡もこれにかかわり、手順を踏んで軍務官の大村益次郎も含めた政府部内のコンセンサスを取り付けつつ実現しようとしていたことがわかる。この「蘭医」採用が、オランダ医学の採択を意味するのかドイツ医学を加味するのか、医学の内容を知る手段はない<sup>91)</sup>。またこの「蘭医」が誰かを確定する術もないが、ただおそらくそれはボードインと見て大過なかろう。これらのことに示されるように、5月の段階では、岩佐は松岡らとともに、ウイリスと対立せずむしろ協調を図りながら、医学校兼病院におけるイギリス人医師ウイリスとオランダ人医師との併用を企図していたのである。

このことは、ウイリスの5月16日（1869年6月25日）のフアニー・ウイリス宛書簡の中にも、「ところで、私は病院を任されているので当然ですが、大変忙しくしています。私のやり方には多くの障害が立ちはだかっています。古い医者たちは皆漢方に凝り固まっているか、蘭方に執着しているかのどちらかなのです。ここで英国医学の体制を築くことができるか否かは時が決めてくれるでしょう。私としては最善を尽くすのみです。できなければ、それまでのことです」（傍点—尾崎<sup>92)</sup>）とあり、ウイリスが自らの前に立ちだかるものとして、ドイツ医学ではなく「蘭方」を記していることでも確認できる。



明治2年5月の段階まで進められていたのは、イギリス、オランダ両国人医師を併用する計画だったのである。ボードインの「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」が、これは相良が日本語で記した可能性が強いことはすでに述べたとおりだが、そこに「欧羅巴教師三人」と国名を明記していなかったように、岩佐や相良らの当初の対応はイギリス人医師の採用に対しても門戸を開いていたのである。

ところが、第三に、これにウイリスが反対をする。松岡らの認識が「蘭医御用之儀ハ篤と御局へ御熟談之上最初よりの順序承り」と、オランダ人医師の採用は手順を踏んできたことであったのに対して、石神ら旧横浜軍陣病院のメンバーが医学校兼病院の全権を握ったこともあり、ウイリスは、「英の医法のみ」用いることが「御条約」であると迫り、それに違<sup>たが</sup>えることは、「日本政府の信義無之、以の外の次第」として猛反発したのである。ウイリス自身、前出の通りわざわざ故郷への書簡の中で「蘭方」を自らの前に立ちだかる障害と書き記しているくらいであるから、よほど憤慨したのであろう。しかし、松岡や岩佐らにとってみれば、これは「率爾覆意」と記されているように、思いも寄らぬウイリスの翻意にほかならなかった。

対立の焦点は、岩佐や松岡らが模索してきたウイリスとオランダ人医師とを併用するか、ウイリスらがこれを拒んで「英の医法のみ」の単独採用を実現するかにあるのであって、少なくとも、岩佐や相良がはじめからドイツもしくはオランダの医学のみの採用に固執して、イギリスのそれと対立するといった図式ではなかったのである。

これが、ウイリスが両国医師の併用計画に異議を唱えたことで、岩佐や相良を相当に刺激したらしい。

本真之医学校病院御創営ニ相成候上<sup>者</sup>、最初より見込之通 皇国之医道正法を以相定度奉存候間、大坂長崎共轍を同し学を一途ニ帰し教師を撰び御雇ニ相成度奉存候、依之「ウイリス」御雇年限之儀<sup>者</sup>追而真面之医学校病院御營造ニ相成候迄之御見込を以御定ニ相成可然奉存候、若御見込難被為立候ハ、一ケ年宛之御雇ヲ以御条約ニ相成候様仕度奉存候、「ウイリス」ハ治療向ニおゐてハ格別尽力仕勞功多く、別而當時ハ函館戰場患者夥入院罷在候得ハ至極御用便ニ相成候得共、重而教師相撰候節ハ東京を初め大坂長崎共総而一新仕度奉存候事

医学校権判事<sup>(93)</sup>

右は、医学校権判事名義で出された意見書であるが、みられるようにウイリスについて、その戊辰戦争時の功績は認めるものの教師としてはそぐわず、したがってその任期は医学校兼病院の新築が成るまで、もしくは新築の目途が立たない場合は1年間限りの契約にとどめ、それ以後の雇用は見送るよう求めている。医学校取調御用掛及権判事になったものは岩佐、相良の他におらず、彼らは7月18日には大学少丞に任ぜられるから、これはそれ以前のもので、また先の松岡の書簡にあったように5月10日までは少なくとも



岩佐はウイリスとの交渉の窓口となっていたから、その手前このような強硬な意見を出すとは考えがたく、したがってこの意見書は5月から7月前半の間に提出されたものと考えられる。すなわち、ウイリスが医学併用の計画に異議を唱えたことを翻意とらえた岩佐、相良らは、ウイリスの排斥へと急速に舵を切ったようなのである。当時岩佐、相良の下僚であった長谷川泰の伝記を著わした山口梧郎は、相良、長谷川、石黒忠恵などが画策してウイリスの授業を妨害したと記している。その強硬な妨害の様子には確かに信じがたいところもあるが、もしこれが本当だとしたら、おそらくこの頃におこなわれたのであろう。

5月10日以降の動きにつき、いま文献史料をもって確認できることを示すと以下のとおりとなる。

まず、松岡の書簡と同じ5月10日、東京府の管轄となっていた医学校兼病院は、再び大学校設立の準備を急ぐ昌平学校に移管される<sup>96)</sup>。この時石神良策は、14日に改めて昌平学校の「医学校諸局取締」に任命されているから、引き続き医学校兼病院を管理する立場にとどまったようなのだが、6月17日付けの島津忠義宛達<sup>97)</sup>に、「其方家来石神良策謹慎可差免事」とあるから、その後6月までの間に何らかの科で謹慎処分となったようである。そして、石神が謹慎中の6月15日、周知の昌平学校の大学校への改組がおこなわれ、医学校は開成学校などとともにその分局として正式に位置づけられることとなった<sup>99)</sup>。相良らの悲願であった医学校を大学校に組み込むことが成就したわけである。

これに対して、山内豊信（5月15日から学校知事）は、ウイリスの側に立ってあくまでその雇用にもうけて動いたようである。豊信のもとで学校判事となっていた細川潤次郎<sup>100)</sup>は、7月3日の松岡時敏宛書簡の中で、「英医雇入約定之儀ニ付、於開成所兼而雇入レ約定書案文等取調朝廷へ指出之、来ル七日迄ニ約定ニ相成候様可取計旨中納言様（山内豊信一注、尾崎）より秋公（秋月種樹一注、尾崎）へ被返書」と記している。開成学校での外国人教師雇入の契約書を参照して、ウイリスと雇用契約を一刻も早く交わすべく、豊信が判学事であった秋月種樹に返書したというのである。これに対して秋月は、「旁医学校権判事へも熟議之上ならては難取計儀ニ有之」として、「此旨趣小子より老兄へ申上候様」と、細川から松岡にこのことを伝えるよう申し送りをしている。「医学校権判事」たる岩佐、相良の意向を確認しないではウイリスとの契約を進めることはできないと、松岡や細川、さらには副知学事（判学事）として山内豊信を補佐してきた秋月までが、ウイリスに荷担する豊信の行動に疑問を呈するようになってきているのである。

結局、7月6日には山内豊信が学校知事を辞職する意向を固め、7月9日正式にこれが認められる<sup>103)</sup>。これにかわって、8月24日、岩佐の主家松平慶永が大学校を管轄する大学別当に任ぜられたことは周知の通りである。<sup>104)</sup>

ただし、豊信が辞職したからといって、ウイリスやイギリス公使パークスが直ちにイ

ギリス医学の採用をあきらめたわけではない。松平慶永が外務卿沢宣嘉に宛てた10月6日の書簡には、「英国ミニストル小生邸へ入来いたし度旨英医ウリースヲ以テ申越候故、今日招き候而面会之積ニ候」とあり、また同日の沢からの返信にも、「雖然今日之参上ハ必医学校論と存候、右之儀ニ岩倉へも面会いたし度段申述候」とあったように、まだ彼らは医学校の件につき慶永や岩倉具視への直談判を続けていたのである。<sup>105)</sup>しかし沢が、岩倉が「右事情御承知無之、突然英公使へ御答ニ相成候而<sup>者</sup>、彼レ必万々不平ヲ鳴ラ」すことになるので、すでに「昨夕岩倉へ事情内々申入置候事ニ有之候」と記されていたように、<sup>106)</sup>彼らの間ではすでにその対応の仕方は固まっていたようである。この後、10月25日にはウイリスの辞意表明にもとづき沢とパークスの間での話し合いがもたれる。この時沢は、「然ルニ病院ノ儀ハ昨冬<sup>そうそつ</sup>匆卒ニ取立十分盛大ノ規則モ未タ不相立候ニ付」、<sup>ウイリス</sup>「ウリス氏先一年ト申入候事ニ候」と、<sup>107)</sup>そもそもウイリスの任期が一年限りであったと、岩佐、相良の意見書が用いた論法を援用して対応する。これに対し、パークスはウイリスの後任を出すことを断り、<sup>108)</sup>28日にウイリスが薩摩藩医学校に赴任する旨契約を取り交<sup>109)</sup>わすと、ここにイギリス人医師（イギリス医学）の医学校兼病院への採用の道は閉ざされることとなったのである。

さて、ウイリスおよび彼を推す石神や山内豊信が5月から7月、そして10月とその勢いを失っていった一方で、ボードインも同様に大学校の分局となった医学校への採用は見送られていった。明治2年8月、ボードインは大阪府医学校病院に改めて一年間採用されることが正式に決定されたのである。<sup>110)</sup>ボードインを大阪にとどめることが、ウイリスを鹿児島に送ることとの兼ね合い、イギリスとオランダの両者痛み分けといった発想で起こったものなのかどうか、確実な史料はなく推測の域を出なくなるので、ここでは言及を差し控える。ただし、岩佐、相良、そして松岡らはそれまで仮病院であった大阪の医学校病院を整備することに尽力したようで、松岡は、岩佐、相良の両名を大学少丞から大学大丞に昇進させ、そのうち一人は「大坂府へ立帰り」と、大阪へ赴任させることを進言する。<sup>111)</sup>実際には岩佐が大阪に赴任したようで、<sup>112)</sup>また松岡自身も、10月17日には「京都学校並大坂病院御取建ニ付彼地出張被仰付候事」と大阪病院の整備に乗り出している。<sup>113)</sup>ちょうどウイリスが鹿児島へ赴くのと同一時期に、ボードインに対しても相応の待遇を用意して、結果的には両者とも東京の医学校（12月17日より大学東校）から退けられる格好となったのである。

本稿の第一節で、「一 教師は独逸国より壮年盛学之医、英学ニ達候者を御雇相成度候事」とドイツ医学の採用を上表した相良の建議案を明治2年の8—10月頃のものとして推定しておいたが、ドイツ医学を単独で採用する案が浮上するのは、ちょうど以上にイギリス、オランダ両国の医師が退けられたときのことであった。以上の過程に基づいて、明治2年12月8日、大学校は次の伺を出し、これを出発点に政府は正式にドイツ

人医師の招聘に動き出す。

今般英医ウリス御暇被下置候ニ付テハ、急ニプロイセン国ヨリ盛学ノ医官二人英語ヲ以教授イタシ候者、来年ヨリ向六ヶ年御徴被下度、右ハ医生英語ニ達候故必英語ニテ教授可致呉様、最初ヨリ御定約有之度候事

十二月八日<sup>115)</sup>

以後、明治3年2月14日、政府は北ドイツ連邦公使ブランドとドイツ人医師雇用の「定約書」を取り交わし、ただ普仏戦争のために到着は遅れたが、明治4年7月にミュレルとホフマン<sup>116)</sup>が着任したのである。

ドイツ医学およびドイツ人医師が採用されるのは、以上のように見てくると、学問としての優秀性ももちろんその要因となったであろうが、西洋医学採用の議論の中に、ウイリスやボードインと違って当事者として加わってはいなかったことにもその理由があったのではあるまいか。いささか消去法的な選択の中で最後に残ったのがドイツ人医師の採用であったのではないかと、筆者は考えるのである。

## 5 おわりに

以上、本稿では明治維新以降の西洋医学導入の過程を検討し、イギリス医学を推進する者とドイツ医学を推す者といった対立がはじめからあったわけではないことを明らかにしてきた。明治元年末に学校権判事に任命され大学校の設立にあたった松岡時敏や、同2年初頭に医学校取調御用掛及権判事に登用された岩佐純や相良知安らが当初模索していたのは、医学校兼病院でのイギリス人医師ウイリスとオランダ人医師との併用であった。この併用計画をウイリスが拒んだ明治2年5月頃からむしろウイリスや彼を推す山内豊信（学校知事）と岩佐、相良との対立が深まり、後者による前者の排斥が起こるのであって、ドイツ人医師を招聘し医学校兼病院から改組した大学校分局としての医学校（12月より大学東校）におけるドイツ医学への一本化の方針が定まるのは、結局ウイリスの鹿児島医学校への転出と、おなじくボードウィン<sup>117)</sup>の大阪医学校病院での継続雇用が決まる中で浮上した、いささか消去法的な選択によるものであった。

さて、本稿で筆者は、『松岡時敏関係文書』や東京大学医学部図書館に所蔵されている諸文書、関寛斎の『家日記抄』など、これまであまり利用されてこなかった文献史料を採り入れ、複雑なドイツ医学採用に至る経緯を再構成することに徹してきた。そのため、事実関係の確認に全ての紙幅を費やしたので、その背景にある関係者の思想といったことには触れることができなかった。相良知安が述べたような医療や医師が蔑まれる世の雰囲気<sup>118)</sup>を排して、いかにして医を「官立」の大学の中に位置づけるかは興味深い問題であり、本稿では全く触れることのなかった和漢医との関係も視野に入れてこれは検

討する必要があるそうである。かかる問題を含めて、日本近代における医の立ち上げをさらに多角的に検討していくのが今後の課題となる。

〔追記〕本稿の作成にあたっては、大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター研究プロジェクト（2012年度）からの助成をうけた。

〔注〕

- 1) 相良知安（弘庵）は、天保7年（1836）に佐賀で生まれている（1906年没）。相良の家は、代々洋医として佐賀藩医を勤めた家柄である。知安も、藩の医学校を皮切りに、佐倉の順天堂、そして文久3年（1863）には、長崎養生所で後述のボードインに学び洋医の道に踏み出すことになる（鍵山栄『相良知安』（1973年、日本古医学資料センター）を参照のこと）。
- 2) 同上、122頁。
- 3) 田中潮洲「相良知安」（『医海時報』1577号、1924年10月25日）。
- 4) 富士川游『日本医学史』（1904年、裳華房）、926－929頁。以下の記述は、同書に依っている。
- 5) ウィリアム・ウィリス（William Willis, 1837年－1894年）は、アイルランド出身。エディンバラ大学で医学の博士号を取得しロンドンで病院医を勤めた後、文久2年（1862）に来日、横浜公使館付補佐官兼医師となる。戊辰戦争への従軍や、東京下谷和泉橋通の大病院での勤務、さらには鹿児島医学校に移り、高木兼寛ら日本の海軍軍医制度の整備をリードする人々を育成したことで知られる（Hugh Cortazzi, *Dr. Willis in Japan, 1862-1877: British medical pioneer*, 1985, Athlone Press）。なおコータッツィの著書については、中須賀哲朗による邦訳書が出されているが、原書と比べてやや内容に異同があり、訳者自身の見解とみられるものが多く盛り込まれている。したがって、本稿では同訳書は用いず、原書から引用をおこなうことにする（中須賀哲朗訳『ある英人医師の幕末維新』、1985年、中央公論社）。
- 6) アントニウス・ボードイン（Anthonius Franciscus Bauduin, 1820－1885年）は、オランダ陸軍軍医で、ユトレヒト陸軍軍医学校の教官を勤めた後、ポンペの後任として文久2年に来日、長崎の医学伝習所と小島養生所（後の長崎精得館）で医学教育と治療にあたった。
- 7) 岩佐純（玄珪）は、天保7年（1836）越前福井藩の藩医の家に生まれた（1912年没）。岩佐の家は、元来和漢医のうち古方で知られたが、純は藩主松平慶永の理解を得、江戸の坪井信良や佐倉順天堂の佐藤尚中（舜海）についてオランダ医学を学び、次いで長崎に留学。ボンベヤ、ボードインに師事した（「岩佐純小伝」、『中外医事新報』第765号、1912年2月）。
- 8) 『医制五拾年史』（1925年、内務省衛生局）、6－7頁。
- 9) 小川鼎三編『東京大学医学部百年史』（1967年、東京大学医学部創立百年記念会）、104－106頁。
- 10) 『医制百年史』記述編（1976年、ぎょうせい）、76頁。
- 11) 富士川游記「石黒先生昔年医談」（『中外医事新報』331号、1894年1月5日）。
- 12) 同上（『中外医事新報』332号、1894年1月20日）。
- 13) 「岩佐玄珪外一名ニ医学校取調御用掛及権判事ヲ命ス」、明治2年1月22日（『太政類典』第1編、第30巻）。
- 14) 石黒忠恵『懐旧九十年』（岩波文庫版、1983年）、163頁。
- 15) 前掲、鍵山『相良知安』。
- 16) 森川潤「江戸のオランダ医学構想—ボードインの去就をめぐって—」（広島修道大学人文学会『広島修大論集』第34巻第1号、1993年9月）。
- 17) 大山瑞代訳、吉良芳恵解説『幕末維新を駆け抜けた英国人医師—甦るウィリアム・ウィリ

- ス文書一』(2003年、創泉堂出版)。
- 18) Cortazzi, op. cit.
  - 19) 前掲、大山訳『幕末維新を駈け抜けた英国人医師』、429-430頁。
  - 20) ただし、このうち5月16日=1869年6月25日のファニー・ウィリス宛書簡(前掲、大山訳『幕末維新を駈け抜けた英国人医師』、426-428頁)は重要と思われ、これについては後述する。
  - 21) 『東京大学百年史』通史1(1984年、東京大学出版会)。
  - 22) 同上、98-123。および、197-243。
  - 23) 同上、236-237頁。
  - 24) 同上。この史料は、『東京帝国大学五十年史』上冊(1932年、東京帝国大学)、374-375頁からの引用として記されているが、その原文は、佐賀県立図書館所蔵の『相良家資料』のうち、「主意」と標題の付けられた文書に別紙として添付された文書であると思われる(『相良家資料』相939)。
  - 25) 「礪元水戸邸へ大学校建設三学合併ノ儀伺」、明治2年10月(『公文録』、第23巻)。
  - 26) 前掲、『東京大学百年史』通史1、209-210頁。
  - 27) 同上、239頁。
  - 28) 最近の研究では、吉良枝郎『幕末から廃藩置県までの西洋医学』(築地書館、2005年)などもあるが、やはり以上述べてきた問題点には答えられていない。
  - 29) 朝廷では、慶応4年3月8日、典医寮医師高階経由、経徳親子らの建言にもとづき、西洋医学が採用されるようになる(「西洋医術採用」、明治元年3月8日、『太政類典』、第1編、第81巻)。
  - 30) 「鹿兒島藩主島津忠義、英医ウィリアム・ウィリスを京都に聘し、以て兵士の瘡痍を治せしめんことを請ふ。之を聴す」、明治元年1月24日(『維新史料綱要』第8巻、116頁)。
  - 31) 「ファニー・ウィリス宛ウィリアム・ウィリス書簡」、1868年5月16日(前掲、大山訳『幕末維新を駈け抜けた英国人医師』、370頁)。
  - 32) 「医学所開成所ヲ収ム」、明治元年6月13日(『太政類典』、第1編、第19巻)。
  - 33) 「旧幕府医学所ノ跡ヲ以テ創メテ医学所ヲ興ス」、明治元年6月26日(『太政類典』、第1編、第23巻)。
  - 34) 「仮病院ヲ東京ニ置キ医学所之ヲ管ス」、明治元年7月20日(『太政類典』、第1編、第19巻)、および『明治元年六月ヨリ 日誌』、明治元年7月20日の条、および8月6日の条(東京大学医学部図書館所蔵)。
  - 35) 「横浜病院ヲ医学所ニ移ス」、明治元年7月20日(『太政類典』、第1編、第19巻)。
  - 36) 「石神良策ニ医学所病院種痘館徴院薬園五局取締ヲ命ス」、明治2年1月17日(『太政類典』、第1編、第30巻)。また、第1大学区医学校『明治戊辰ヨリ 学校履歴』には、「二年己巳正月二至り緒方玄蕃少允母ノ疾ニ値ヒ請暇而上坂ス、石神良策之ニ代リテ事務ヲ司ル」とある。
  - 37) 「ファニー・ウィリス宛ウィリアム・ウィリス書簡」、1869年3月8日(前掲、大山訳『幕末維新を駈け抜けた英国人医師』、416頁)。
  - 38) 「七月十二日、大総督府、石神某、福田某を以て横浜病院頭取と為し、病院頭取柴岡某、大沢某を罷む」、明治元年7月12日(『復古記』第10巻、531頁)。
  - 39) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』下巻、1869年1月11日(明治元年11月28日)の条(1960年、岩波文庫版、241頁)。
  - 40) 同上、1868年12月5日(明治元年10月22日)の条(前掲、岩波文庫版、228頁)。
  - 41) 「議定山内豊信・弁事秋月種樹・権弁事菱田文蔵を以て学校取調用掛を兼ねしめ、高知藩士松岡七助を同掛と為す」、明治元年11月2日(『維新史料綱要』第9巻、585頁)、および「議



- 定山内豊信を以て知学事を兼ねしむ」、明治元年12月13日（『維新史料綱要』第9巻、647頁）。
- 42) 「東京府所管医学所ヲ学校管轄トス」、明治元年12月25日（『太政類典』、第1編、第118巻）。
- 43) 医学所と病院は、明治元年10月25日に東京府から軍務官に移管され、以後11月中旬に再び東京府所管に戻されたが、病院については一般の患者とは別にまだ戦傷病者が多くを占めたため引き続き軍務官がこれを支配した（「医学所ヲ東京府ニ属ス」、明治元年11月17日、『太政類典』、第1編、第19巻）、および「軍務官所管病院ヲ更ニ東京府ニ属ス」、明治元年11月15日、『太政類典』、第1編、第118巻）。
- 44) 「軍務官病院、英国医師ウイリスを雇備す」、明治元年12月25日（『維新史料綱要』第9巻、667頁）。
- 45) 「医学所ヲ東京府ニ属ス」、明治2年1月17日（『太政類典』、第1編、第19巻）。
- 46) 「医学所ヲ旧津藩邸ニ移シ病院ト合併医学校兼病院ト称ス」、明治2年2月（『太政類典』、第1編、第23巻）。
- 47) 同上。
- 48) 「岩佐玄珪外一名ニ医学校取調御用掛及権判事ヲ命ス」、明治2年1月22日（『太政類典』、第1編、第30巻）。
- 49) 岩佐純「東京医科大学の起源」（『刀圭新報』第2巻第4号、1910年11月）。
- 50) 同上、岩佐「東京医科大学の起源」。
- 51) 相良知安「回想」、[1886年]（『相良家資料』、相988、佐賀県立図書館所蔵）。
- 52) 前掲、富士川游『日本医学史』、928頁。
- 53) 前掲、『東京大学百年史』通史1、209-210頁。ボードイン「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」（明治2年3月）の原文は、『明治三年 諸規則』（東京大学医学部図書館所蔵）所収。
- 54) 前掲、ボードイン「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」。
- 55) 同上、ボードイン「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」。
- 56) 同上、ボードイン「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」。
- 57) 相良知安「医学校構造ノ方向」（『相良家資料』相939、佐賀県立図書館所蔵）。
- 58) 関寛斎『家日記抄』1、慶応4年2月29日の条（銚子市立公正図書館所蔵複写版、147頁）。
- 59) 新宮拙蔵は、この後ウイリスとともに越後の戦線に従軍していることが確認できる（「会津征討越後口総督府、病院を高田に設け、山口藩医赤川玄樫を頭取と為し、外人医師を雇ひて創痍者の治療に当らしむ。尋で、病院を柏崎に移す」、明治元年8月18日、『維新史料綱要』第9巻、344頁）。
- 60) 関寛斎『家日記抄』1、慶応4年3月19日の条（銚子市立公正図書館所蔵複写版、149頁）。
- 61) 『明治元年六月ヨリ 日誌』、明治元年6月29日の条（東京大学医学部図書館所蔵）。
- 62) 前掲、『日誌』、巻末「職務進退」の項。月岡らの出身藩等、詳細は不明。
- 63) 前掲、『日誌』、明治元年7月11日の条。
- 64) 前掲、『日誌』、明治元年7月9日の条。
- 65) 前掲、『日誌』、明治元年7月17日の条。
- 66) 前掲、『日誌』、明治元年7月21日の条。
- 67) 日本史籍協会編『百官履歴』1（1927年、東京大学出版会）、88頁、および毛利敏彦『江藤新平 増訂版』（1987年、中公新書）、35頁。
- 68) 星原大輔「江藤新平の明治維新—「東京奠都の議」を中心に—」（早稲田大学大学院社会科学研究所紀要『ソシオサイエンス』12、2006年3月）。
- 69) 前掲、『日誌』、明治元年9月4日の条。
- 70) 前掲、『日誌』、明治元年7月17日の条、および同20日の条。
- 71) 前掲、『日誌』、明治元年7月20日の条、および同8月1日の条。
- 72) 前掲、『日誌』、明治元年9月1日の条。



- 73) この意見書は、「保護健全意見書」との標題で大学東校名義で明治3年に提出されているのが『医制百年史』資料編（前掲、32-34頁）に掲載されているが、その下書きにあたるものが、「草案」の標題で「正六位大学権大丞藤原知安」（相良知安）の名で江藤新平のもとに送られている（『江藤家資料』、江013-504、佐賀県立図書館所蔵）。
- 74) 「松岡七助外一名ニ学校頭取ヲ命ス」、明治元年12月12日、および「山内豊信外数名ニ学校知学事以下職員ヲ命ス」、明治元年12月14日（いずれも『太政類典』、第1編、第30巻）。
- 75) 大久保利謙「東京新政府の大学構想」（『大久保利謙歴史著作集4 明治維新と教育』1987年、吉川弘文館、所収）。
- 76) 「東京府所管医学所ヲ学校管轄トス」、明治元年12月25日（『太政類典』、第1編、第118巻）。
- 77) いま松岡が記した「郷貢ノ法」と題された文書が残されており、これは、「今ノ公議所御廃シナレハ」の文言から、公議所の置かれた明治2年3月7日から同年7月8日の間、特にその後半期に書かれたものであらうと思われるが、「今ノ公議所御廃シナレハ此貢士ノ法ヲ設テ書生トシ、其内ニテ公議人ヲ出シタキ事」とあるように、貢士の制度を設けて大学校を公議人の養成機関たらしめんとしていたことが分かる。そして、その貢士の採用について、「国学局貢士三名」「漢学局貢士三名」「洋学局貢士三名」とともに、「医学局貢士三名」と、医学校も他と同様に公議人の養成機関として位置づけられていたのである（松岡時敏「郷貢ノ法」（『松岡時敏関係文書』3-73、東京大学史料編纂所所蔵）。
- 78) 前掲、相良知安「回想」。
- 79) 「岩佐大学少丞・相良大学少丞の兩人を大学大丞に任じ、医学校・病院専務にそれぞれ申付られたく、評議方歎願の草案」（『松岡時敏関係文書』3-177）。岩佐、相良の兩名が大学少丞に任ぜられるのが明治2年7月18日、大学権大丞に就任するのが同10月10日であるから、この松岡の書簡は、この間に書かれたものと思われる（相良知安「履歴書」、『相良家資料』、相986.7）。
- 80) 前掲、ボードイン「医学校兼病院ヲ建ルノ通則」。
- 81) 前掲、『日誌』、明治元年10月3日の条。
- 82) 前掲、アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』下巻、1868年11月19日（明治元年10月6日）の条（岩波文庫版、222頁）。
- 83) 同上、1868年12月5日（明治元年10月22日）の条（岩波文庫版、228頁）。
- 84) 「東京府病院へ御医師出張療養行届シメントシ尋テ之ヲ止ム」、明治元年10月24日（『太政類典』、第1編、第81巻）。
- 85) 「軍務官東京医学所ヲ管ス」、明治元年10月25日（『太政類典』、第1編、第106巻）、および「病院取締ヲ置ク」、明治元年11月2日（『太政類典』、第1編、第19巻）。
- 86) 「石神良策ニ医学所病院種痘館黴院薬園五局取締ヲ命ス」、明治2年1月17日（『太政類典』、第1編、第30巻）。
- 87) 「ジョージ・ウィリス宛ウィリアム・ウィリス書簡」、1869年2月9日（明治元年12月28日）（前掲、大山訳『幕末維新を駆け抜けた英国人医師』、410頁）。
- 88) 同上。
- 89) 『嵯峨実愛日記』第3、明治2年3月10日の条（日本史籍協会、1931年、35頁）。正親町三条実愛は、この後5月7日に知学事となっている（「議定正親町三条実愛をして知学事を兼ねしむ」、明治2年5月7日、『維新史料綱要』第10巻、105頁）。
- 90) 「大村益次郎宛松岡七助書翰」、明治2年5月10日（『松岡時敏関係文書』3-182、東京大学史料編纂所所蔵）。
- 91) 岩佐の、ボードインと深く熟議し、欧州中医学の卓越した国としてドイツに秀でるものではなく、ドイツに範を採ることを決定し、政府に建言したという回顧が正しいとすれば、ドイツ医学を加味するものであった可能性は高いとみられる（前掲、岩佐「東京医科大学の

起源」)。

- 92) 「フアニー・ウィリス宛ウィリアム・ウィリス書簡」、1869年6月25日(明治2年5月16日)(前掲、大山訳『幕末維新を駆け抜けた英国人医師』、427頁)。
- 93) 前掲、『明治三年 諸規則』所収。
- 94) 相良知安「履歴書」(『相良家資料』、相986.7)。
- 95) 山口梧郎『長谷川泰先生小伝』(1935年、長谷川泰先生遺稿集刊行会)28-29頁。
- 96) 「昌平校医学校病院ヲ管ス」、明治2年5月10日(『太政類典』、第1編、第19巻)。
- 97) 「医学校ニ教授ヲ置ク」、明治2年5月14日(『太政類典草稿』、第1編、第21巻)。
- 98) 「島津宰相ノ家来石神良策謹慎差免ノ事」、明治2年6月17日(『太政類典』、外編)。
- 99) 「昌平学校を改めて大学校と称し、其規則を定め、開成・医学・兵学三校を大学校の分局と為す」、明治2年6月15日(『維新史料綱要』第10巻、138頁)。
- 100) 「山内豊信外数名ニ学校知学事以下職員ヲ命ス」、明治元年12月14日(『太政類典』、第1編、第30巻)。
- 101) 「七月三日付松岡七助宛細川潤(閨二郎)書翰」、明治2年7月3日(前掲、『松岡時敏関係文書』1-4-ロ-198)。
- 102) 「前知学事山内豊信・前上局議長大原重徳を並に麝香間に祇候せしむ」、明治2年7月13日(『維新史料綱要』第10巻、168頁)。
- 103) 同上。
- 104) 多くの回顧談や聞き取り史料は、フルベッキがドイツ医学を推奨したことに触れている。おそらくこの明治2年7月前後のことであろうと思うが、現状では同人が記したとされる証言書も残されておらず、フルベッキの書簡などにも関連した記述は見受けられないので、本稿ではあえて言及を控えることにする(高山道男編訳『フルベッキ書簡集』、1978年、新教出版社などを参照のこと)。
- 105) 「外務卿沢嘉寛松平慶永書簡」、および「大学別当松平慶永宛沢嘉寛書簡」、ともに明治2年10月6日(春嶽公記念文庫『御書翰留』)。ただし、本稿は、大久保利謙『明治維新と教育』、大久保利謙歴史著作集4、1987年、吉川弘文館、296-297頁、掲載のものを援用した)。
- 106) 同上。
- 107) 「医学校雇英国医師ウィリス乞暇ニ付代教師雇入ヲ該国公使ヘ托ス」、明治2年10月29日(『太政類典』、第1編、第57巻)。
- 108) 同上。
- 109) 前掲、大山訳『幕末維新を駆け抜けた英国人医師』、429-430頁。
- 110) 「大坂病院建設ニ付蘭医ボートイン雇入并定額金等伺」、明治2年9月(『公文録』、第23巻)。
- 111) 「岩佐大学少丞・相良大学少丞の兩人を大学大丞に任じ、医学校・病院専務にそれぞれ申付られたく、評議方歎願の草案」(『松岡時敏関係文書』3-177)。この書簡の日付については、注79を参照のこと。また、「松岡時敏履歴」(『松岡時敏関係文書』3-66)。
- 112) 「岩佐権大丞外一名大坂ヨリ帰京届」、明治3年1月(『公文録』、第24巻)。
- 113) 「松岡時敏履歴」(『松岡時敏関係文書』3-66)。
- 114) 『東京帝国大学五十年史』上冊(1932年、東京帝国大学)、374-375頁、および相良知安「主意」(『相良家資料』、相939)。
- 115) 前掲、『東京大学百年史』通史1、241頁を参照。
- 116) 同上、241-243頁。